

学校教育ふじさわビジョン

- 基本構想 -

学校教育ふじさわビジョン - 基本構想 -

< 目次 >

はじめに	... 1
. 子どもたちの変化	
1 . 社会の急激な変化	... 1
2 . 子どもを取り巻く環境の変化	... 1
3 . 変わる子どもの姿	... 2
4 . 取り組むべき課題	... 2
. 課題解決へのアプローチのために	
学校教育ふじさわビジョン構想図	... 3
. 基本構想	
1 . 育もうとする「新しい知」	... 4
2 . めざす子ども像	... 5
(1) 成熟した市民となって明日の「ふじさわ」をつくる子どもたち	... 5
(2) 自分を生かし人に役立つ子どもたち	... 5
(3) とともに育つ子どもたち	... 6
3 . めざす教師像	... 6
(1) 子どもたちの学びを支える学校	... 6
(2) 学びをデザインする教師	... 6
(3) 専門家としての責任とプライドを持った教師	... 7
4 . 学校と家庭・地域との関わり	... 7
(1) 家庭との連携	... 7
(2) 地域（市民）との協働	... 7
(3) 学校からの発信	... 7
つくり続けていくビジョン	... 8

はじめに

急速に変化する社会の中で、子どもたちの未来を見据えたあるべき教育の姿が求められています。国段階でも、これまで中央教育審議会等を中心に21世紀の教育が論議され、その答申をもとに新学習指導要領が告示され新しい教育課程が始まりました。

こうした状況を受けて、藤沢市教育委員会では、学校教育ふじさわビジョン検討委員会を設置し、明日の藤沢市を担う市民として望ましい資質を育むことをめざして、藤沢の子どもたちをどう育てるのか協議を重ねてきました。

そして、これからの藤沢の学校教育はどうあるべきか、そのめざす理念について示し、今、学校が重点的に取り組むべきものを提起するために「学校教育ふじさわビジョン」を作成しました。

各学校において、このビジョンが提起する内容について理解を深め、日々の教育活動全般にわたって、明確な目的意識と共通意識を持って、その実現に向けて実践し努力されるよう期待します。

．子どもたちの変化

今、子どもたちを取り巻く社会の急激な変化とともに子どもたちの姿が変わり、様々な教育課題が生まれ、その課題への対応が求められています。

1．社会の急激な変化

社会のグローバル化が進み、様々な分野で国際社会の影響が大きくなってきました。多様な文化が交錯するなか、自国の文化を尊重するとともに他国の文化を正しく理解することが必要な時代になっています。

また、携帯電話やインターネットの普及に象徴されるように子どもたちにとっても身近なところで情報化が進み、利便性が飛躍的に増加しました。反面、それを正しく使いこなすための知識やマナーを身につけることが求められるようになりました。

社会の変化にともない保護者や地域に生きる人たちの価値観も多様化しています。そのため、学校に対しても多様なニーズが寄せられると共に、これまでの常識やモラルに当てはめて考えることが通用しない場面も出ています。

そして、こうしたグローバル化、情報社会の広がりのなかで、日本の産業構造そのものが大きな転換期を迎えており、より不透明性が高まる中、子どもたちにとっても将来への展望が描きにくい状況が生まれています。

2．子どもを取り巻く環境の変化

様々な開発に伴う地域の自然の減少にともない、身の回りの自然とふれあう機会が奪われ、自然と関わる体験・経験が少ないままに育っている状況があります。

また、自然だけでなく、人との関わり方についても変化が見られます。核家族化や少子化によって、家庭において一人の子どもと関わる人の数が減少しています。そして、両親が共働きという家庭が増加し、その少ない家族とふれあう時間も減少しています。

遊びについても変化が見られます。異年齢同士の集団を構成して遊ぶ機会がほとんどなくなり、同年齢の子どもたちとの遊びが中心となりました。また、子どもたちにとって習い事をするのが当然のようになり、遊ぶための時間を合わせるために調整

することが必要な実態もあります。そのため、ひとりで遊ぶ時間が増え、電子媒体のゲームやマンガ、パソコン等が、子どもたちがひとりで遊ぶ環境を支えています。

他者との関係づくりを苦手とする子どもたちが増えてきていることと、こうした他者とふれあう機会や時間の減少とは、無関係とは言えないでしょう。

この傾向は、子どもたちだけのものではありません。保護者同士もお互いのコミュニケーションがうまくとれない傾向が見られるようになりました。このことは、家庭・地域の教育力の低下にも結びついています。

3 . 変わる子どもの姿

社会や環境の変化は子どもたちの姿を変えています。

第15期青少年問題審議会（総務庁 平成11年）の答申では、青少年をめぐる基本認識の中で、問題行動を起こした子どもたちの意識等にみられる特徴として次の4点をあげています。

- ・社会の基本的なルールを遵守する意識の希薄化
- ・自己抑制力の欠如
- ・言葉を通じて問題を解決する能力の不足
- ・自尊の感情の欠如

そして、こうした傾向は現代の青少年一般にもみられることであると指摘しています。このような子どもたちによって、校内暴力、学級崩壊等といった現象が引き起こされるとも考えられます。

一方で、子どもたちの他者とのつながりの希薄化は、社会的な体験・経験の乏しさと相まっていじめや不登校の増加という現象となって現れています。また、自己を肯定的にとらえられず、自己を確立することが困難な子どもも増えています。

学習の面では、藤沢市教育文化センターで35年間行ってきた子どもたちへの調査の結果をみると、学習意欲が以前より低下している状況が見られます。また、子どもたちにとって、学校が、勉強の場としてよりもむしろ友だちづきあいの場として重要な意味を持つものになってきていることも読みとれます。

このことは、学校での学習が、子どもにとって価値あるものとして感じられないということの意味しているとも考えられます。

4 . 取り組むべき課題

こうして子どもたちの様子を概観すると、学校教育が対応すべきものとして次のような教育的課題が見えてきます。

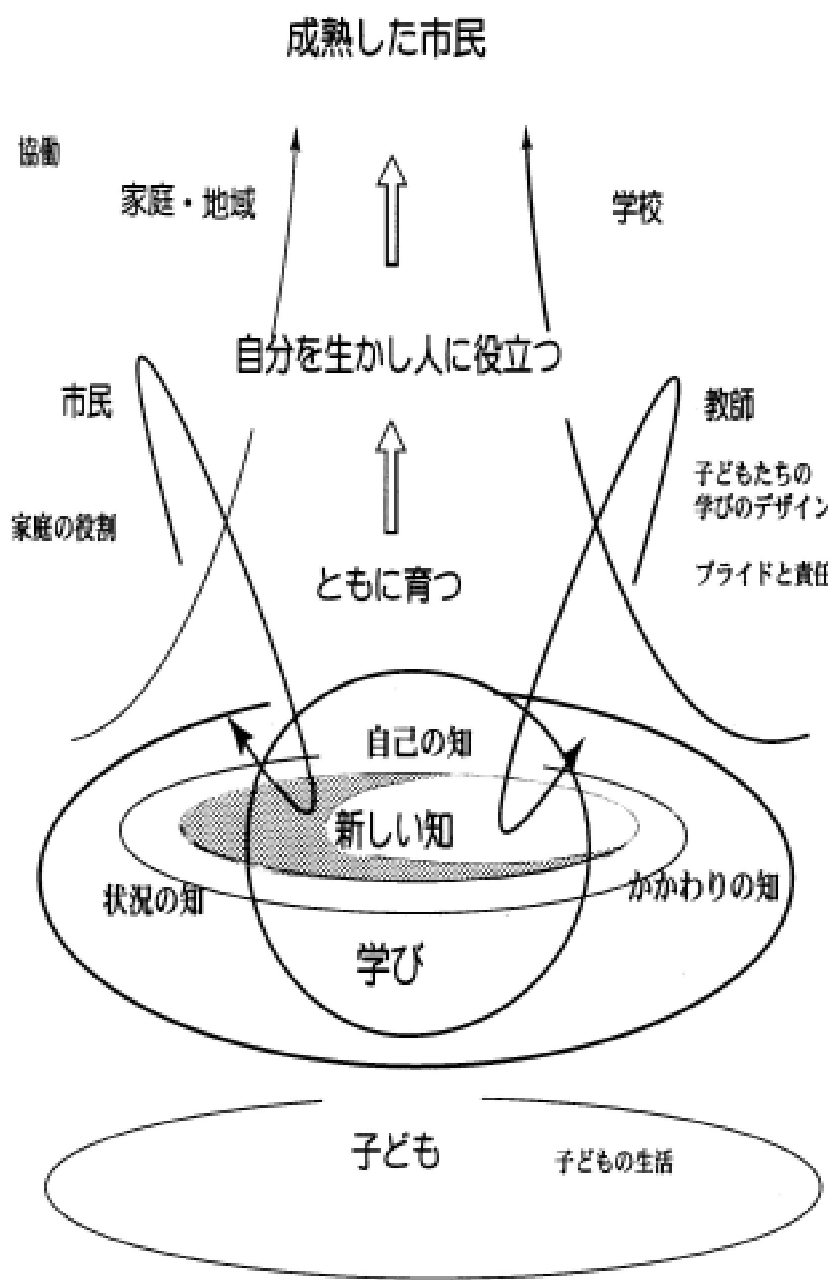
- ・国際化、情報化社会を生きるための力を育てる
- ・社会性のある価値観やモラルを身につけさせ、規範意識を育てる
- ・自然や社会、他者と関わる体験・経験を豊かにする
- ・学校が家庭・地域と連携を深め、家庭・地域の教育力を高める
- ・学習意欲を高めるために、学校での学びの質を向上させる
- ・自己を肯定し確立できるよう、そして将来への展望が描けるよう支援する

・課題解決へのアプローチのために

課題解決のためのアプローチとして、次のページの構想図に示すような学びの構造で、藤沢市の学校教育ビジョンを構想しました。

このビジョンでは、

学校教育ふじさわビジョン 構想図



- ・子どもたちに「新しい知」を育む
- ・子どもたちがともに育つ場をつくりだし、人と人との関係性を育む

ことを中軸に置きながら、こうした課題を乗り越えて成長した姿として、「成熟した市民」を想定し、それに向かってめざす子どもの姿として「自分を生かし人に役立つ」という子ども像を想定しました。

また、学校（教師）および家庭・地域を、子どもたちの学びを支える要素として考えました。

．基本構想

- ・子どもたちに「新しい知」を育む
- ・子どもたちがともに育つ場をつくりだし、人と人との関係性を育む

ために次のような基本構想を立てました。

1．育もうとする「新しい知」

教育の目的については、「人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」と教育基本法で示されています。

私たちは、人格の完成を、従来から、知・徳・体の調和のとれた発達としてとらえ、学校の中のさまざまな教育活動を行ってきました。

本来「知」とは、「知ること」であり、子どもたちにとっては、自分の周りの世界の「ひと」や「もの」や「こと」を知ることです。学校教育において、私たちはこの「ひと」「もの」「こと」を子どもたちが学習することによって「知るべきこと」「わかるべきこと」として授業の中に位置づけ、それを「知識」と呼んできました。そして、「知識」を身につけさせるために各教科の授業を中心とした教育活動を行ってきました。

また、授業では、学習内容を教師がことばや記号で伝達し、それを子どもたちにことばや記号で思考・判断させ、その結果として子どもたちがことばや記号で再現できるようになった状態のことを「知る」「わかる」ととらえる傾向がありました。そして、それを知識が身についた状態であると考えてきました。

しかし、知識は、人がそれぞれの状況の中であって、自らが自分の中に構成されている知識を基にして再構成していくものです。その子どもと関わりなく、どこか別の所に知識だけが独立して存在するものではありません。ですから、断片的な知識をいくらか寄せ集めて記憶したとしても、それは知識としてその子どもの身につけているということにはなりません。その子ども自身が「わかった」と納得できたとき（腑に落ちたとき）、初めて知識としてその子どもの中に構成され、知識が身についたととらえるべきでしょう。

これからの学校教育では、言葉だけの知識を覚えさせるのではなく、本当にその子どもの身についた生きて働く知識を獲得させなければなりません。そこで、これまで狭い意味でとらえられてきた「知識」と区別する意味で、「知る」ということの原点に戻って、あえて「知」と言うことばを用いました。こうした総合的な「知」を「新しい知」としてとらえ、これからの時代を生きる力の中核となるものと考えました。

「新しい知」は、「ひと」「もの」「こと」との関係の中で子どもの中に育まれる能力であり、社会に関わろうとし、周囲の状況を見極めながら行動できる「知」です。この「新しい知」として、「自己の知」「状況の知」「かかわりの知」の3つをあげることができます。

「自己の知」とは、自分の考えていることや行為を客観的に見つめられる「知」です。自分とは何か、まわりの人とどのようにつながっているか、自分は何をやりたいのか、また、やりたいことに向かって進んでいるか、そうしたことを自己評価し、自己の効力感につなげていく実践的な知です。

「状況の知」とは、ある状況の中でとるべき行動が社会の中にはありますが、そのとるべき行動様式を身につけていることを言います。まわりの変化をよく感じ取り、それに流されることなく変化に合わせて自らを変えていくことのできる知です。

また、「かかわりの知」は、「自己の知」「状況の知」の獲得が、さまざまな人々との関係や社会との結び付きの中で身につくものであるということです。また、自然と関わったり、歴史上の事柄や祖先の知恵など目に見えないものともつながりながら、今の自分を成長させていくものです。

こうした「自己の知」「状況の知」「かかわりの知」は、日常生活の中で育まれていくものですが、教師の役割として、この「新しい知」を意識し、あらゆる教育活動の中で子どもたちを支援していく必要があります。

例えば、教科学習で教科の学習内容と関わる力をどのようにつけていくか、その学習を自分は何のためにしているのか、その学習をするに当たって今自分がなすべきことは何か、等について子どもに気づかせたり、子どもにわかるように説明したりすることが一人ひとりの教師に求められています。

2. めざす子ども像

(1) 成熟した市民となって明日の「ふじさわ」をつくる子どもたち

私たちの都市^{まち}「ふじさわ」は、文化を創造し文化を享受する意識が高く、市民による文化活動が盛んに行われています。各公民館におけるサークル活動も盛んで文化都市の名にふさわしい活気にあふれています。こうしたことから、「ふじさわ」は、成熟した市民の都市であるにとらえられます。

成熟した市民とは、広く個々人が豊かな人間性と教養を持ち、単に生活者としての「住民」から自立(自律)した「市民」となり、行政や地域社会への「参画」と「責任」を担う立場の人々を指します。

こうした多くの成熟した市民に支えられて発展している都市^{まち}であることが、藤沢市の特色でもあると考えます。

「ふじさわ」の明日をつくり支えていくためには、このような市民を育てていくことが大切です。「学校教育ふじさわビジョン」は、子どもも市民であるというとらえを基にしながら、学校教育を通して、子どもたちをこのような成熟した市民に育成することをめざしたものです。

(2) 自分を生かし人に役立つ子どもたち

子どもたちを成熟する市民として育てるために、「ひと」「もの」「こと」とのかかわりの中で、「自分を生かし」「人に役立つ」という人間を育成することをめざします。

「自分を生かし人に役立つ」とは、次のような子どもの姿を想定したものです。

- ・いつも夢や希望をもつ
- ・のびやかな、そして、しなやかな感性を磨く
- ・自分を知り、自立(自律)できる
- ・挑戦する気持ちを持つ
- ・変化に対して自分自身を変えていくことができる

- ・人を思いやる
- ・人や自然と共生しながら、自分らしく生きる
- ・対象によりよくかかわろうとし、働きかける
- ・人とのつながりをつぎつぎと広げていく など

子どもたちは、教師や家族や地域の人たちから教わったり、自然や社会との関わりの中から知ったりという、経験を通した自らの「学び」の中で、「新しい知」を育んでいくのです。

(3) とともに育つ子どもたち

学校は、子ども同士、また子どもと教師が互いの関係の中で、様々なことを経験し、それらのことを意味づけていく場です。また、家庭や地域も、子どもと大人が、互いの多様な関係の中で経験し意味づけていく場ととらえられます。

こうした場の中で、子どもは、あらかじめ決められた事柄を教師や大人によってただ教え込まれるだけの存在ではありません。その子なりの願いを持ち、自身で学び育とうとしています。ですから、全ての子どもたちが一人ひとり個性を持った存在として尊重され、互いの関係の中で支え合い、学び合っるとともに育っていくように支援することが必要です。教師や大人自身も、「子どもとともに育つ」という意識を持つことが大切です。そして、

- ・お互いのよさを認め合う
- ・相手を尊重できる
- ・自分の周囲の人たちに関心を持ち、関わろうとする
- ・仲間意識を持って協力して行動する
- ・主体的に生きる

といった子どもの姿があらわれるよう、子どもたちが、教師が、そしてそこに集う人々が「ともに育つ」場を積極的に形成します。

3. めざす教師像

(1) 子どもたちの学びを支える学校

学校は市民の信託の上に成り立ちます。このことを念頭に置いて、教師は、教育の専門家としての責任とプライドをもって、「知」の学習を推進します。具体的には、次のような姿勢で、子どもたちの「学び」を支える学校をつくります。

- ・子どもの願い(実態)を受け止めて、計画づくりをする
- ・一人ひとりの学習状況を把握し、学習活動を組み立てる
- ・校内研究を充実し、共同して授業づくりをする
- ・保護者、地域とともに(連携して)教育をすすめる
- ・実践した教育活動に対して、自ら評価し次の教育活動に生かす

(2) 学びをデザインする教師

これからの教師には、協働意識を持って学校経営に参画して子どもの学びを支えるとともに、「ひと」「もの」「こと」との関わりの中で子どもの学びをデザインすることが求められています。

そこで、

- ・学校と家庭・地域との関わりを大切にしながら、開かれた学校をデザインす

る

- ・学校を取り巻くさまざまな教育課題に対し、同僚や家庭・地域と連携してその課題を解決するプロセスをデザインする
- ・同僚性を大切に、共感・支援しながら仲間との関係をデザインし、仲間とともに成長する教師集団をつくる
- ・実践した活動を自己点検・自己評価するとともに、柔軟性・しなやかさを持ち、自己を拓くことにより、自分自身の成長をデザインする

といった資質や能力を磨きながら、一人ひとりの教師が「学びをデザインする教師」になることをめざします。

(3) 専門家としての責任とプライドを持った教師

一人ひとりの教師が、専門家としての責任とプライドを持って教育活動に取り組むことによって保護者や市民の信頼に応えることができ、学校の社会的な責任が果たせます。それは、教師としての誇りと使命感、専門的知識と技能、熱意とやる気、に裏付けられたものです。そして、「私が支えている学校」という帰属意識を持ち、自己を変革し続ける姿勢を持つことによって醸成されてゆくものです。

また、常に、「明日のふじさわをつくる市民を育てる」という自覚を持つことも必要です。

4. 学校と家庭・地域との関わり

(1) 家庭との連携

子どもたちが健やかに成長していく上で、その生活の中心となる家庭の果たすべき役割について、再確認することが大切です。家庭と地域がどう協力し、役割を担うべきか話し合う「場」をつくり、家庭の役割について再確認することを呼びかけます。そして、学校と家庭が連携し、子どもたちを育てます。

(2) 地域（市民）との協働

課題解決のために互いが関わりを持ち、より効果的な結果を導き出すためにともに取り組むことを協働とよびます。

学校が広く地域（市民）と協働することによって、学校の力だけではできないことを実現させていくことも可能になってきます。これからの学校教育を充実させる上で、地域（市民）との協働を大切にしていきます。

(3) 学校からの発信

これからの学校は、子どもの実態や地域の状況に応じて、学習指導要領に基づきながら、授業を工夫し、意欲的に学校づくりに取り組むことが求められます。こうした取り組みを通して、学校ごとの特色あるカリキュラムが創造され、「新しい知」が育まれていきます。

それぞれの学校は、「自分を生かし人に役立つ」子どもの姿をめざして、子どもの実態や地域の特色を生かしながら「学校の教育目標」を定めます。

その目標は、地域に向けて発信され、各学校は保護者や地域に対しての説明責任を果たすと共に、保護者や地域の理解と協力を得ながら教育目標の実現に向けて共に取り組んでいきます。

また、学校は年度末に、一年間の教育活動を振り返り、学校の教育目標に照らして

- ・子どもたちがどう育っているのか（「新しい知」が育まれつつあるのか）
- ・それがどの程度達成されたか

を自己評価し、また、評議員等による意見を受け、それらを次年度の教育計画に生かして「学校の教育目標」の実現をめざします。

つくり続けていくビジョン

「学校教育ふじさわビジョン」は、学校教育に携わる教師同士が、また、教師と保護者や地域の人たちが、心を合わせて明日のふじさわをつくる子どもたちを育てることを目指して作成したものです。それぞれの学校が自らのビジョンを生み出し、実践し、評価し、再構成していく姿勢と力が求められています。

ですから、このビジョンも、つくり続ける（- i n g）という性格を持っているのです。各学校での実践を取り入れ、生かしていくために、継続的に改訂し続けます。